

海潮音

上田敏訳詩集

新潮文庫



新潮文庫

草 194 = 1

昭和二十七年十一月二十八日 発行
昭和四十三年二月十五日 二十刷改版
昭和五十八年一月十五日 四十三刷

訳者 上^{うえ}田^だ 敏^{びん}

発行者 佐藤 亮 一

発行所 株式 新 潮 社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)二六六一五一
編集部(〇三)二六六一五四〇
振替 東京四一八〇八番
定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

⑤ 印刷・株式会社金羊社 製本・憲專堂製本株式会社
© Shinchôsha 1952 Printed in Japan

ISBN4-10-119401-7 C0192

新 潮 文 庫

海 潮 音

上田敏訳詩集



新 潮 社 版

遙に満洲なる森鷗外氏に此の書を献ず

大寺の香の煙はほそくとも、空にのぼりて
あまぐもとなる、あまぐもとなる。

獅子舞歌

海潮音 序

卷中収むる処の詩五十七章、詩家二十九人、伊太利亞に三人、英吉利に四人、独逸に七人、プロヴァンスに一人、而して仏蘭西には十四人の多きに達し、曩の高踏派と今の象徴派とに属する者その大部を占む。

高踏派の壯麗体を訳すに当りて、多く所謂七五調を基としたる詩形を用ゐ、象徴派の幽婉体を翻するに多少の変格を敢てしたるは、その各の原調に適合せしめむが為なり。

詩に象徴を用ゐること、必らずしも近代の創意にあらず、これ或は山岳と共に旧きものならむ。然れどもこれを作詩の中心とし本義として故らに標榜する処あるは、蓋し二十年来の仏蘭西新詩を以て嚆矢とす。近代の仏詩は高踏派の名篇に於て発展の極に達し、彫心鏤骨の技巧実に燦爛の美を恣にす、今ここに一転機を生ぜずばあらざるなり。マラルメ、ヴェルレエヌの名家これに観る処ありて、清新の機運を促成し、終に象徴を唱へ、自由詩形を説けり。訳者は今の日本詩壇に對て、専らこれに則れと云ふ者にあらず、素性の然らしむる処か、訳者の同情は寧ろ高踏派の上に在り、はたまたダンヌンチオ、オオバネルの詩に注げり。然れども又徒らに晦澁と奇怪とを以て象徴派を攻むる者に同ぜず。幽婉奇聳の新声、今人胸奥の絃に触るるに

あらずや。坦々たる古道の尽くるあたり、荆棘路を塞ぎたる原野に對て、これが開拓を勤むる勇猛の徒を貶す者は怯に非らずむば情なり。

訳者嘗て十年の昔、白耳義文学を紹介し、稍後れて、仏蘭西詩壇の新声、特にヴェルレーヌ、ヴェルハアレン、ロオデンバッツハ、マラルメの事を説きし時、如上文人の作なほ未だ西欧の評壇に於ても今日の声誉を博する事能はざりしが、爾来世運の転移と共に清新の詩文を解する者、漸く数を増し勢を加へ、マアテルリンクの如きは、全欧思想界の一方に覇を称するに至れり。人心觀想の默移実に驚くべきかな。近体新声の耳目に嫺はざるを以て、倉皇視聽を掩はむとする人々よ、詩天の星の宿は徙りぬ、心せよ。

日本詩壇に於ける象徴詩の伝来、日なほ浅く、作未だ多からざるに當て、既に早く評壇の隅に囁々の語を為す者ありと聞く。象徴派の詩人を目して徒らに神経の鋭きに傲る者なりと非議する評家よ、卿等の神経こそ寧ろ過敏の徵候を呈したらずや。未だ新声の美を味ひ功を収めざるに先ちて、早くその弊竇に戦慄するものは誰ぞ。

歐洲の評壇また今に保守の論を唱ふる者無きにあらず。仏蘭西のブリュンチエル等の如きこれなり。訳者は芸術に對する態度と趣味とに於て、この偏想家と頗る説を異にしたれば、その云ふ処に一々首肯する能はざれど、仏蘭西詩壇一部の極端派を制馭する消極の評論としては、稍耳を傾く可きもの無しとせざるなり。而してヤスナヤ・ポリヤナの老伯が近代文明呪詛の声として、その一端をかの「芸術論」に露したるに至りては、全く賛同の意を呈する能はざるな

り。トルストイ伯の人格は訳者の欽仰措かざる者なりと雖も、その人生觀に就ては、根本に於て既に訳者と見を異にす。抑も伯が芸術論はかの世界觀の一片に過ぎず。近代新聲の評騭に就て、非常なる見解の相違ある素より怪む可きにあらず。日本の評家等が僅に「芸術論」の一部を抽読して、象徴派の貶斥に一大声援を得たる如き心地あるは、毫も清新体の詩人に打撃を与ふる能はざるのみか、却て老伯の議論を誤解したる者なりと謂ふ可し。人生觀の根本問題に於て、伯と説を異にしながら、その論理上必須の結果たる芸術觀のみに就て賛意を表さむと試むるも難いかな。

象徴の用は、これが助を藉りて詩人の觀想に類似したる一の心状を読者に与ふるに在りて、必らずしも同一の概念を伝へむと勉むるに非ず。されば靜に象徴詩を味ふ者は、自己の感興に応じて、詩人も未だ説き及ぼさざる言語道斷の妙趣を翫賞し得可し。故に一篇の詩に対する解釈は人各或は見を異にすべく、要は只類似の心状を喚起するに在りとす。例へば本書一〇二頁「鷺の歌」を誦するに當て読者は種々の解釈を試むべき自由を有す。この詩を広く人生に擬して解せむか、曰く、凡俗の大衆は眼低し。法利賽の徒と共に虚偽の生を営みて、醜辱汚穢の沼に網うつ、名や財や、はた樂欲を漁らむとすなり。唯、縹緲たる理想の白鷺は羽風徐に羽撃きて、久方の天に飛び、影は落ちて、骨蓬の白く清らにも漂ふ水の面に映りぬ。これを捉へむとしてえせず、この世のものならざればなりと。されどこれ只一の解釈たるに過ぎず、或は意を狭くして詩に一身の運を寄するも可ならむ。肉体の欲に鑒きて、とこしへに精神の愛に飢ゑた

音

潮

海

る放縱生活の悲愁ここに湛^たへられ、或は空想の泡沫^{ほうまつ}に帰するを哀みて、真理の捉^とへ難きに憧^{あこ}が
る哲人の愁思もほのめかさる。而してこの詩の喚起する心状に至りては皆相似たり。一二五
頁「花冠」は詩人が黄昏^{たそがれ}の途上に佇^{たたず}みて、「活動」、「樂欲」、「驕慢^{きょうまん}」の邦^{くに}に漂遊して、今や帰
来^{きた}れる幾多の「想」と相語るに擬したり。彼等默然として頭俛^たれ、齋^{もた}らす処只幻惑の悲音のみ。
孤^{ひと}りこれ等の姉妹と道を異にしたるか、終に帰り来らざる「理想」は法苑林^{ほうおんりん}の樹間に「愛」と
相睦^{むつ}み語らふならむといふに在りて、冷艶^{れいえん}素香の美、今の仏詩壇に冠たる詩なり。

訳述の法に就ては訳者自ら語るを好まず。只訳詩の覚悟に關して、ロセッティが伊太利古詩
翻訳の序に述べたると同一の見を持したりと告白す。異邦の詩文の美を移植せむとする者は、
既に成語に富みたる自國詩文の技巧の爲め、清新の趣味を犠牲にする事あるべからず。しかも
彼^{かの}所謂逐語訳は必らずしも忠実訳にあらず。されば「東行西行雲^{びようびよう} 眇眇^{びようびよう}。二月三月日遲遲」を
「とぎまにゆき、かうぎまに、くもはるばる。きさらぎ、やよひ、ひうらうら」と訓^よみ給ひけ
む神託もさることながら、大江朝綱^{おおえのあさつな}が二条の家に物張の尼が「月によつて長安百尺の楼に上
る」と詠じたる例に従ひたる処多し。

明治三十八年初秋

上 田 敏

目次

燕の歌	ガプリエレ・ダンヌンチオ	一五
声曲	同	一九
真昼	ルコント・ドウ・リイル	二〇
大饑餓	同	二三
象	同	二七
珊瑚礁	ホセ・マリヤ・デ・エレディヤ	三三
床	同	三五
出征	同	三七
夢	シュリ・プリュドン	三九
信天翁	シャルル・ボドレエル	四一
薄暮の曲	同	四三
破鐘	同	四五
人と海	同	四七

泉	シャルル・ボドレエル	四九
譬 喩	ボオル・ヴェルレエヌ	五三
よくみるゆめ	同	五四
落 葉	同	五五
良 心	ヴィクトル・ユウゴオ	五八
礼 拝	フランソア・コペエ	六三
わすれなぐさ	ウィルヘルム・アレント	七三
山のあなた	カアル・ブッセ	七三
春	パウル・バルシュ	七四
秋	オイゲン・クロアサン	七五
わかれ	ヘリベルタ・フォン・ポシンゲル	七六
水無月	テオドル・ストルム	七七
花のをとめ	ハインリッヒ・ハイネ	七八
瞻 望	ロバート・ブラウニング	七九
出 現	同	八二
岩陰に	同	八四

春の朝
 至上善
 花くらべ
 花の教
 小曲
 恋の玉座
 春の貢
 心も空に
 鷺の歌
 法の夕
 水かひば
 畏怖
 火宅
 時鐘
 黄昏
 銘文

ロバート・ブラウニング 八六
 同 八七
 ウィリアム・シェイクスピア 九〇
 クリスティナ・ロセッティ 九二
 ダンテ・ゲブリエル・ロセッティ 九四
 同 九六
 同 九八
 ダンテ・アリギエリ 一〇〇
 エミール・ヴェルハアレン 一〇二
 同 一〇四
 同 一〇七
 同 一〇九
 同 一一一
 同 一一三
 ジオルジュ・ロオデンバッハ 一一五
 アンリ・ドウ・レニエ 一二七

愛の教
 花冠
 延びあくびせよ
 伴奏
 賦
 嗟嘆
 白楊
 故国
 海のあなたの
 解悟
 篠懸
 海光

アンリ・ドゥ・レニエ 一三三
 同 一二五
 フランシス・ヴィエレ・グリフィン 一三一
 アルベエル・サマン 一三五
 ジアン・モレアス 一三七
 ステファアンヌ・マラルメ 一四三
 テオドル・オオパネル 一四五
 同 一四六
 同 一四七
 アルトゥロ・グラアフ 一四八
 ガブリエレ・ダンヌンチオ 一四九
 同 一五〇

海

潮

音

燕の歌

ガブリエレ・ダンヌンチオ

弥生^{やよひ}ついたち、はつ燕^{つばめ}、

海^{うみ}のあなたの静けき国の

便^{たより}もてきぬ、うれしき文^{ふみ}を。

春のはつ花、にほひを尋^とむる

あゝ、よろこびのつばくらめ。

黒と白との染分^{そめわけ}縞^{しま}は

春の心の舞姿。

弥生来^{きさくらぎ}にけり、如月^{きさらぎ}は

風もろともに、けふ去りぬ。

栗鼠^{りす}の毛衣^{けごろも}脱ぎすてて、